

長崎のチャンポン

長崎の食べ物といたら、何を思い出しますか。
きっとチャンポンも思い出すでしょう。

チャンポンはだれが作り始めたのでしょうか。



明治二十五年のことです。中国から十九才の陳平順さんが、長崎にやってきました。
陳さんは、中華料理店を開くために、リヤカーに着物を作るための反物をつみ、長崎から島原まで売りに行き、お金をためました。

陳さんが長崎に来て二年目に、日本と中国の間で戦争がおきました。だんだん戦争がはげしくなると、今までいっしょに、なかよく長崎に住んでいた中国人たちに、てきの国の人だと言うことで、ぼりりよくをふるう人が出てきました。戦争の前は、長崎に六百人の中国人の人がいましたが、戦争が始まってからは、三百人の人が中国に帰ってしまいました。

陳さんは迷っていました。

ちようどそのころです。長崎の県知事さんは、「たとえ日本と中国が戦争をしていて

も、長崎に住んでいる人は、同じなかまですから、あらそいごとをしないようにしましょう。」と、よびかけました。

七年後の明治三十二年に、陳さんはついに中華料理店を開きました。

また、陳さんは、中国から勉強のために長崎に来た学生たちの世話もしました。そのころの学生はあまりお金がなく、毎日の食事にも苦労をしていました。そこで、学生のためにと、安くて、ボリュームがあり、えいよういっぱいの料理を考えました。昔はかんづめやれいぞうこがなかったので、材料をそろえるのに苦労しました。そこで、長崎の海でとれるイカやカキ、小エビ、もやしやキャベツなど、季節の材料を使うことにしました。こうして長崎の「チャンポン」ができあがりしました。陳さんは、学生がチャンポンをおいしそうに食べるすがたを見て、とてもうれしくなりました。

陳さんの知り合いは、商標登録をしてチャンポンを自分が作ったものだと登録すると、お金をもうけることができるかと教えてくれました。

しかし、陳さんは多くの人に食べてもらいたいと思い、登録をしませんでした。安くおいしいチャンポンは、たちまち長崎の町に広まっていききました。こうして、チャンポンは長崎の名物になったのです。